目次

Ⅰ　はじめに

Ⅱ　場所の記憶

１）旧コザ市

（ａ）特徴

（ｂ）米軍基地

２）Ａサイン―記憶―

（ａ）オフ・リミッツ以前

（ｂ）オフ・リミッツ～旧Ａサイン制度

（ｃ）旧Ａサイン制度～新Ａサイン制度

（ｄ）新Ａサイン制度以降

Ⅲ　聞き取り調査―住民意識―

１）Ａサインを掲げている元Ａサイン店

（ａ）チャーリー多幸寿

（ｂ）オーシャン

（ｃ）メキシカンハウスレストランリマ

（ｄ）サンライズホテル

２）Ａサインを掲げていない元Ａサイン店

（ａ）アジアンフレーバーズ

（ｂ）やま

（ｃ）響

３）元Ａサイン店以外

Ⅳ　考察

Ⅴ　おわりに

Ⅰ　はじめに

1945年8月15日，日本は第二次世界大戦争の終焉を告げるポツダム宣言を受諾した。同年9月7日，旧越来村において，沖縄戦の降伏調印式が行われ，沖縄市ではこの日を「沖縄市民平和の日」としている。そして，戦後60周年の2005年9月7日，沖縄市は戦後文化資料展示室「ヒストリート」を開設した。同展示室は戦後史や当時の文化などが一目で分かるように，写真・パネル年表・戦後の雑貨品などが展示されている。また，「ヒストリート」が盛況であったため，4年後の2009年同月同日に「ヒストリートⅡ」が開設した程，沖縄市では戦後文化を見直す動きが少なからず見受けられる。これらの展示室の目玉となっているのは，「ヒストリート」にあるAサインバーを再現したカウンターだ。Aサイン[1)]に関しての詳細は後述するが，簡単に説明すると，Aサインとは，飲食店やホテルなどに米軍人・軍属が立入ってもよいというAPPROVED（許可済）の頭文字Aを表した営業許可証のことで，写真1にあるように1953年より発行され店内外に表示されていた。Aサインを取得するには，衛生・施設面での厳しい検査をクリアする必要があった。Aサイン制度は途中一時中断するものの，1963年8月より新Aサイン制度に移行した後，沖縄県が本土に復帰した1972年に廃止された。現在は，写真2にあるように，沖縄Aサイン連合会が佐世保市で入手した許可証を参考とし，また米軍よりデザインの使用許可を得て，独自の標識を発行したものを採用している[2)]。そんなAサインの写真を，沖縄市が出版している雑誌「KOZA BUNKA BOX」では表紙とし

て扱っている。さらに，2000 年度に沖縄市中央パークアベニューのセンター商店街振興組合では，商店街の空き店舗を生かし，ユニークで特色ある事業を展開したいという企画を募集する「ドリームショップグランプリ」を開催したのだが，グランプリと準グランプリには，A サインを“Dream”に替えた「D サイン」を賞金などと共に与えていた [3]。こうした状況を考慮に入れると，沖縄県沖縄市とりわけ旧コザ市において，A サインは，場所のアイデンティティを示すものであり，また沖縄市役所のみならず，住民達にとっても何らかの記憶を想起させるものではないかと考えた。そこで本稿では，住民達が A サインについてどのような「場所の記憶」を感じているのかを明らかにしていく。

では，A サインに関する先行研究は一体どのようになっているのかというと，調べた限りでは，嘉陽義治「A サイン制度とオフ・リミッツ」（沖縄国際大学文学部社会学科一九八六年度卒業論文，1987 年），同「新聞記事を中心に見る特飲街へのオフ・リミッツ発令（一九五一～五二年）」（沖縄市総務部総務課『KOZA BUNKA BOX』第 3 号，2007 年），小野沢あかね「コザにおける特飲街」（沖縄市企画部平和文化振興課『KOZA BUNKA BOX』第 2 号，2000 年），山崎孝史「USCAR 文書からみた A サイン制度とオフ・リミッツ」（沖縄市総務部総務課『KOZA BUNKA BOX』第 4 号，2008 年），沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール「戦後コザにおける民衆生活と音楽文化」（1994 年）などが挙げられ，これらの先行研究によって，A サインの様相は明らかになりつつあると言えるだろう。ただし，元 A サイン店から A サインについてどのような「場所の記憶」を感じているのかの聞き取り調査を

している研究は見当たらないので，ここにコザ市にとってＡサインを通した場所のアイデンティティを示す意義があるのではないかと考える。

以上のことから，本稿では，沖縄県沖縄市，とりわけ旧コザ市にある元Ａサイン店を事例にして，聞き取り調査を中心にＡサインが住民意識の中にいかなる「場所の記憶」を持つのか，これを明らかにしていく。そのために，第２章では，二次資料を参考にして，旧コザ市と米軍基地との関係に触れながら，Ａサインの歴史的経緯を再考することで，旧コザ市におけるＡサインの持つ「場所の記憶」について把握していく。第３章では，2010年10月25日～29日に聞き取り調査を実施した９件を例として挙げる。内訳は，まず米軍発行・沖縄Ａサイン連合会発行問わず，現在Ａサインを掲げている元Ａサイン店「チャーリー多幸寿」「オーシャン」「メキシカンハウスレストランリマ」「サンライズホテル」。次に，現在Ａサインを掲げていない元Ａサイン店「アジアンフレーバー」「やま」「響」。最後に，元Ａサイン店以外の店に，Ａサインの持つ「場所の記憶」について聞き取り調査を行う。こうして，これらを基に第４章の考察でまとめていきたい。

Ⅱ　場所の記憶

１）旧コザ市

（ａ）特徴

まず始めに，今回対象地域として挙げている（旧）コザ市の歴史について触れておく。そもそもコザ市というのは，戦前期は越来村と呼ばれ，柑橘類や竹細工を産地とする純農村地域であった[4]。しかし，太平洋戦争時，日本軍は南方の戦線との中継基地として，沖縄本島をはじめとする飛行場建設が本格化し，沖縄県民総動員による守備態勢を作っていったのだが，1945年4月1日，米軍が沖縄本島に上陸し，すぐさま読谷と嘉手納をはじめ周辺地域を制圧され，4月5日にニミッツ布告を発令し，米軍による沖縄占領は「合法化」され，同年6月23日の沖縄戦集結と8月15日の日米戦終結で暫定的に（公式には1952年サンフランシスコ講和条約発効以降）米軍政府の統治下に置かれることになった[5]。こうして米軍の占領下となると，越来村は1956年にコザ村と名称を変更し，同年7月1日に市に昇格して誕生した。「コザ」という名前は，カタカナの市として日本最初の市名であるが，その由来は諸説あるものの，コザ市の中心である胡屋（GOYA）のスペルを読み間違えてコザ(KOZA)と呼ばれるようになった説と，旧美里村の難民収容所の古謝（KOJAもしくはKUZYA）のスペルを読み間違えた説がある[6]。いずれにせよ，米軍がこの地域をキャンプコザと称し，同名の基地があったから名前が変わったように，越来村という地名がコザへと米軍統治によって変わったのは紛れもない事実である。そして，27年間の米軍占領が終焉を迎え，1972年に沖縄が本土復帰すると，その2年後に旧コザ市は美里村と合併して，現在の沖縄市となったのである[7]。

さて，コザ市の主な特徴と言えば，やはり米軍基地との関係で

あろう。なぜならば，コザ市は，戦後から日本復帰時にかけて，機能的には極東最大とされる嘉手納飛行場の門前町として都市形成が進み，沖縄本島中部の中核都市として繁栄したからだ。つまり，経済（特に商業・サービス業）そのものが基地からの需要に依存することによって，那覇市に次いで県下第 2 位の都市となったのだ。とはいえ，基地経済という恩恵を受けたのと同時に，騒音問題や婦女暴行といった迷惑も被ってきた。こうした米軍基地の持つ「両義性」によって支えられながら，コザ市は戦後文化を対立し融合し合い，日本の中でも特異な都市となった。ただし，復帰に伴う基地合理化や円高による経済的な基地依存の減少，さらに近年での（基地跡地利用としての開発を含む）郊外型商業施設の増加によって，現在では中心商店街の衰退が著しい[8)]。以上のように，駆け足ではあるが，コザ市というものが，米軍基地と対立し融合し合うように発展してきたことを記憶にとどめておいてほしい。

（b）米軍基地

では，次章で説明する A サインの前に，コザ市と米軍基地が対立し融合し合うようになった要因について述べていく。それは，1950 年から 1972 年まで米国民政機関として沖縄の統治を担当した琉球列島米国民政府（United States Civil Administration of the Ryukyu Islands『通称：USCAR』）の存在だ。USCAR の設立は，沖縄の長期保有政策が本格化したことを象徴しているのだ

が，USCAR は，民政長官に極東軍司令官が，民政副長官には琉球軍司令官が就き，実質的な最高責任者は民政副長官が指揮し，1957 年 7 月以降は高等弁務官が沖縄統治の最高責任者として君臨し指揮していた。彼らには絶対的な権力が与えられ，たとえば，沖縄の通貨であった B 円軍票紙幣も，1958 年には高等弁務官の布令によりドルへと通貨交換がおこなわれたことがある。そして，その占領統治の根幹には，従来の軍政府から引き継がれた布告・布令・指令の法令システムと，琉球政府に対する覚書・書簡があった[9]。このように，USCAR の存在が，沖縄を米軍占領下へと確実なものとしていたのだ。

そんな米軍占領下で，特にコザ市と米軍基地の関係が深くなっていったのは，2 つの戦争があったからだ。ひとつは，朝鮮戦争の時である。日本の敗戦後，朝鮮半島は北緯 38 度線を境にその南側を米国が，北側をソ連が担当して，半島に駐屯する旧日本軍の掃討作戦を展開していた。これは次第に米ソ両国間の冷戦下の対立へと深刻化させ，1948 年 8 月に大韓民国が成立し（米国承認），翌 9 月には朝鮮民主主義人民共和国が成立した（共産圏諸国より承認）。そのような中で，1949 年 10 月 1 日に共産中国が成立し，1950 年 6 月 25 日には，韓国と北朝鮮が朝鮮半島統一の覇権をめぐって内戦を勃発させた（1953 年 7 月 27 日停戦）。これに伴い，米軍は沖縄基地をソ連と共産中国を睨む極東戦略の最重要拠点として位置付け，沖縄基地の強化・拡大工事が開始された。実際，1949 年前半までは，沖縄に対する軍政府の特別な政策といったものではなく，場当たり的な統治が継続されていた。この年の 11 月に沖縄を訪れたアメリカ人ジャーナリスト（タイ

ム誌記者）も，「沖縄は米国陸軍の才能のない者や，除け者の体のよいはきだめになっていた」と記事で書いたことから伺える[10]。つまり，朝鮮戦争を契機とする世界情勢によって，これまでの場当たり的統治を改め，軍政府として統治方針を確立し，沖縄基地の強化・拡大による労働力需要の高まりから，嘉手納基地の門前町であるコザが，基地の街として本格的に様相を変えていったのである。

そして，もうひとつは，1960 年 12 月から始まり 1975 年まで 15 年間続いた，ベトナム戦争の時である。なぜなら，沖縄はベトナム戦争においても前線基地となっていたからだ。もちろん，横須賀，岩国，佐世保などの在日米軍もベトナムに出動した。しかし，日米安保条約の問題から事前協議が必要だったため，事前協議の対象とはされない沖縄を経由することとなり，沖縄には数多くの米兵が派兵されたのであった。特に，1965 年 2 月 7 日に米軍機が北ベトナムを爆撃した「北爆開始」を機にベトナム戦争もより一層過熱を帯び，ベトナムへの在沖米軍の派兵が本格化したのは 1963 年からで，ピーク時には朝鮮戦争当時を上回る約 55 万人の兵力を投入したと言われている[11]。そんな数多くの米兵が沖縄に集結した結果，基地や米兵にまつわる事件が沖縄では後を絶たず，コザ暴動を代表するように，基地の街であるコザ市は激動の時代を迎えたのであった。とはいえ，数多くの兵士が派兵される沖縄にとって，経済が潤ったのは紛れもない事実で，後述するが，コザ市では多大な影響を受けることとなった。以上のように，USCAR が沖縄における米軍統治を確実にした上で，朝鮮戦争とベトナム戦争といった 2 つの戦争によって，コザ市が基地

の持つ「両義性」を抱えながら，沖縄と米軍とが対立し融合し合い発展していったのである。

２）Ａサイン―記憶―

（ａ）オフ・リミッツ以前

戦後初期，コザの中で特に発展した地域は，BC ストリート（現・中央パークアベニュー）と八重島である。越来村の初代公選村長が飲食街の設置を目的にBCストリートに街を作ってアメリカ兵相手の商売をしようと考えを明らかにしたのと同時期に，BC ストリートの北側である八重島に，米兵相手の歓楽街を設置しようとする特飲街計画が挙がった。この八重島特飲街計画には，米兵から商売する経済的な理由の他に，米兵から婦女子を守るという目的も兼ね備えていた。当時，基地周辺地域では米兵による婦女暴行，致死事件が多発していたので，基地と一般居住地域との間に緩衝地域を設けることにより，米兵の犯罪を防止しようとした。また，米軍側も性病の媒体となる売春婦を囲い込むことができるので，両者の利害が一致した形で，BC ストリートよりも八重島特飲街が先にできたという訳である。こうして朝鮮戦争勃発直前にできた八重島特飲街は，岩山や森によって人目につきにくく，特飲街として絶好の場所だったので，住民地区から隔離された売春街として注目され，当時の沖縄の一大繁華街へと発展した。特に，朝鮮戦争の効果もあって，1950 年末頃には 50 軒の飲

食店が軒を並べて昼夜米兵の遊場となり，1951 年から 1953 年にかけて，ホステス 300 人，人口 1000 余人とふくれあがり，コザの「不夜城」などと呼ばれたりしていた。また，この八重島に建設された特飲街のことを，住民達は「裏町」と呼び，米兵達は「ニューコザ」と呼んでいた。さらに，朝鮮戦争の戦火が激しくなるにつれて，八重島だけではなく，BC ストリートにも米兵達を目当てとした商店やレストランが軒を並べるようになり，コザに大きな影響を及ぼした[12)]。

さて，この時期，コザの住民にとって売春業が一番手っ取り早い金儲けだったことは言うまでもないが，当時，特飲街で働く女性達は「特殊職業婦人」と呼ばれており，八重島には，沖縄本島や宮古・八重山などの離島，奄美大島など各地から，生きるために職を求める女性達が集まっていた。また，経済的な理由から社会状況が「売春は仕方がない」との風潮があったとはいえ，特飲街だけに限らず，売春が日常的に行われ，生活するために場当たり的に売春を行う「街娼」や「パンパン」「ハーニー」「密淫」と呼ばれる女性も存在したので，米軍側は性病の蔓延に頭を悩ましていた。実際，USCAR の民政長官による書簡で，性病撲滅の手段として，米軍要員の居住地域を米軍施設内に制限し，住民との接触を断ち切る手段を講じるかもしれない，と脅しめいていた。米軍が街に出なくなるという経済的影響を考えるならば，実施に踏み切る前に住民側で性病撲滅にもっと積極的に取り組んだ方が良いので，性病撲滅対策を促していた。その対策として住民側から出てきた意見が，八重島特飲街のように一定地域に街娼を集め，性病感染防止策として定期的な検診である「検バイ制度」完

全実施をすることであった。しかし，米軍側からすると，性病に感染した売春婦達との接触が問題であったので，沖縄側の応急処置のような考えと米軍側の抜本的改革を求める間で意見が違った[13)]。

（b）オフ・リミッツ～Aサイン制度

こうした沖縄側との意見の相違から，オフ・リミッツが実施される。オフ・リミッツとは，米軍人・軍属の沖縄の住民地域への立ち入り禁止措置のことで，施設個々へのオフ・リミッツと，地域へのオフ・リミッツがあった。後者は特に，島ぐるみ闘争の沈静化といった政治的な理由に用いられたと言われ，USCAR 公安局文書にそのオフ・リミッツの記述が最初に現れるのは，1952年1月15日で，おそらく売春事案とされている。もちろん，「オフ・リミッツと宣言された建物に入った全ての米軍要員に対して適切な懲罰措置が下される」といったように，米軍要員はオフ・リミッツの処置について周知の事実であった[14)]。ただし，住民達は政治絡みのものであり，米軍の制裁措置だと考えていたようだ。実際は，衛生上の問題からであり，具体的には，売春行為によって「花柳病（性病）」が米兵たちの間に蔓延し始め，朝鮮戦争に派兵される兵士の数に影響を与えたため，これ以上の拡大を防ぐ目的から発令されたものであった[15)]。とはいえ，オフ・リミッツの発令理由である性病の感染防止は，その当事者であるとされた街娼などが立入禁止地区の対象外であるほかの地域へ移

動してしまうので，地域を限定したオフ・リミッツの発令では，その効果が発揮されることがなかった。なので，定期的な検診を実施している八重島特飲街の特殊職業婦人からすれば，性病蔓延を理由としてオフ・リミッツが発令されるのは，正しい措置を取っている住民にとって理不尽な措置であったに違いない[16]。

しかし，理由はどうあれ基地に依存する人々としては，オフ・リミッツ発令は死活問題であった。実際倒産にまで追い込まれる人もいた。そのようなことから，住民達は早急なオフ・リミッツ解除を米軍に陳情するようになった[17]。それ以外に，街娼を歓楽街へ収容することが不可能であると考えた結果，街娼らの売春問題よりも，特飲街で働く特殊職業婦人の性病感染防止策である「検バイ制度」などの徹底を図ることにし，その結果オフ・リミッツの解除に至った[18]。にもかかわらず，1953 年 11 月には米軍司令部より，軍の許可証を有しない飲食店への米軍人・軍属の公用以外の立ち入りを禁止する布令が出されることとなり，これが後にコザの街を特徴づける A サイン制度の前触れとなる[19]。つまり，沖縄側も米軍側も双方，オフ・リミッツでは性病の解決には至らなかったと見受けられ，こうした経緯の中で登場するのが，A サイン制度という訳である。

（c）A サイン制度～新 A サイン制度

このオフ・リミッツ旋風の中で生まれた A サイン制度は，1953 年 11 月に初めて発行された。A サインとは，飲食店や風俗営業，

ホテル業者に米軍人・軍属が立ち入ってもいいというAPPROVED（許可済み）の営業許可証を意味する。ただし，当初から正確に意味していたのかは分からないものの，飲食店に限り「赤のAサイン」の許可表示がない店には米軍人・軍属の立ち入りを米軍司令部は禁止した。Aサインは，レストラン・飲食店は「赤のAサイン」，バー・クラブなどは「青のAサイン」，加工食品は「黒のAサイン」というように3つの色で区分していた。当時は，設備の改善など高額な費用がかかり，また銀行の資金停止も重なり，オフ・リミッツの影響を受けた八重島特飲街の業者にとって，四苦八苦の状態になった。そのせいか，八重島では1956年を境に衰退の一歩をたどる一方，入れ替わるようにしてBCストリートは次第に活気が溢れるようになっていった[20]。

ただし，Aサイン制度で店の衛生環境の質に変化が生じたものの，一歩路地に入ると売春行為がいまだに続けられていた。たとえば，以下のような例があった。1953年1月15日に，東京の有名な遊郭である吉原にあやかって，吉原風俗営業組合が結成された，コザの吉原は，八重島の近くに存在し，民間地域の中に特殊飲食店が散在する他の特飲街とは異なった独立した組合の営業によって，民家に直接悪影響を及ぼさない立地条件を強みに，「白人相手の特飲街」を目的に商売を始めた。しかし，1954年7月8日にオフ・リミッツが実施されて以来，苦境に立たされるようになった。そこで，「白人相手の特飲街」から一転して，「沖縄相手の特飲街」として商売をするようになった。じきに成績が良いことから吉原のオフ・リミッツは1955年4月25日に解除されたものの，その時には沖縄人相手に繁盛するようになっていた。

完全に沖縄人のみというわけではなく，1956 年 9 月頃にはポツポツと外人客が姿を見せ，琉米両方を相手に商売をしていたが，A サインなしでも米兵を入店させていたようだった[21]。つまり，A サイン制度の導入をしても事態は急変することに至らなかったのだ。

もともとは米軍側が売春・性病規制の責任を沖縄側に負わせ，当初はそれを強制的に担わせるために（特に区域に対する）オフ・リミッツを実施していたと言われている[22]。しかし，1956 年には風俗店へ A サイン制度が適用されるなど，この時点では A サインの認可基準が曖昧なものであったことが伺える。こうした問題などを受けて，USCAR では，A サインの施設の数を減少させることによって，監視活動を容易にでき，認可基準を厳格にしていく考えを明らかにするようになっていく。にもかかわらず，1959 年に A サインは一時停止を迎えることとなる。それは，琉球政府社会局（1961 年 8 月から厚生局）が飲食店の許可・衛生審査を適切に管理できるであろうという条件の下に，当時のブース高等弁務官が未認可施設へのオフ・リミッツをすべて解除したからであるが，制度停止に際しては，USCAR 公安局・厚生局が琉球政府の保健職員とともに検討を行った結果，琉球政府による健康・衛生・検査に関わる制度と手続きが改善・厳格化されたと評価され，琉球政府による営業認可制度で米軍向け営業も十分に保証できると判断したのであった[23]。このようにして，売春・性病予防対策として，オフ・リミッツを経て A サイン制度といった施策を導入したものの，売春・性病を根絶することを正確には役割を果たさないまま，一時停止を迎えてしまった。

（ｄ）新Ａサイン制度以降

Ａサイン制度が一時停止になると（飲食店営業許可制度の琉球政府への移管後），風俗営業関係の業者が乱立し，コザの街は性病蔓延が再び過熱し，風紀が乱れた。また，認可施設の多くが米軍要員およびその家族の健康と福祉にとって有害なものとなっていった。こうして 1962 年にキャラウェイ高等弁務官が制度検討に至り，新基準によるＡサイン制度が登場することとなる。1962 年に制定・1963 年に施行された，新Ａサイン制度の認可要件は，大きく立地，建築，内装，設備，衛生，保管，冷凍，食器類，全般といった 10 項目からなり，各項目にさらに多くの細目が付記されていた。このうち立地要件 8 項目のうち 1971 年段階で削除されていた 1 項目を除く全て，建築要件 12 項目全て，内装要件 2 項目全て，設備要件 10 項目のうちカウンターの流しをステンレスと定めた 1 項目を除く全てが新基準に準拠している。衛生要件には被雇用者とトイレに関わる条件が列挙されているが，トイレに関する 11 項目のうち 2 項目が新基準に準拠している。これらの新基準準拠項目は，まず主要道路沿いの立地，街灯の存在，下水溝の覆い，業務地区内の立地，歩道の安全，集合店舗の禁止，地区の美貌といったＡサイン店集積地区の物理的構成と外観の整備を要求し，続いて詳細な施設建設，内装，設備の条件を規定している。衛生要件として新基準が加えたトイレに関する 2 項目とは「トイレは居住地区域に対して開かれていてはなら

ず，適切な照明を備えなければならない」と「男性用と女性用に別の設備がなければならない」である。これは当時売春が店舗のトイレと通ずる奥の部屋で行われていたことに対する措置とも考えられる。要するに，これらの基準は飲食・風俗店およびその集積地区としての特飲街の物的構成と設備・外観の改善によって，売春行為のAサイン施設・区域内からの「空間的」排除を意図するものであった[24]。したがって，Aサイン制度は以前と比べ，物的環境において厳格な基準が設けられることとなった。

ただし，このAサイン復活は，コザの住民を大混乱させた。というのは，新しいAサインの検査基準というのは，衛生面が重視されており，それに変えるためには何千ドルという資本金が必要になったからである。もちろん，従来までにはない高度な衛生観念を身につけることができたのだが，厳しくなった新基準によって施設個々へのオフ・リミッツがみられ，生活に大きな打撃を受けた住民は後を絶たなかった[25]。こうした厳格な新制度の適用によって，改築のための設備投資が可能であった業者のみが申請を行い，その数は1957年の約670店から250店にまで激減した[26]。とはいえ，性病がなくならない限りオフ・リミッツは絶えないと判断した住民側も，新Aサインによる衛生面を重視するようになると，必然的にオフ・リミッツになることが少なくなったのは事実であった[27]。

このキャラウェイ高等弁務官による新Aサイン制度によって，一挙に設備も衛生面も向上したAサイン店だが，今度は「ベトナム特需景気」の米軍基地の恩恵という大波が押し寄せることになる。先述した通り，ベトナム戦争時に沖縄は前線基地として利用

され，多くの米兵が派兵されており，ベトナム戦争の米兵は戦地手当てをもらうと，沖縄での 1 ヶ月ほどの休暇時に，いつ死ぬか分からないから貯めても仕方がなかったという理由で，お金を捨てるように酒や女などに派手に使っていた。その結果，当時の A サイン店は，ドル箱ができる程の嵐であったと言われている。また，この波に便乗するかのように，A サイン店の経営に乗り出す人さえいた [28]。しかし，同時にベトナム戦争によって精神的異常をきたした，荒れ狂う米兵達とのトラブルも途絶えることはなかった [29]。さらには，A サイン制度の厳格化によって，売春が A サイン店の「外」へ転移するだけであって，根本的な性病規制には至ってなかった [30]。

このような状況は，ベトナム戦争の終焉まで続いたのだが，沖縄県が本土に復帰した 1972 年に A サイン制度が廃止されると，その効力が発揮しなくなり，次第には基地の街としてのコザの様相が段々とかげりを見せてくる。その後は先述した通り，A サインは沖縄 A サイン連合会によって存続しているものの，コザ（沖縄市）の歓楽街は復帰を境としていくつものスタイルに別れていった。たとえば，八重島などのように歓楽街としては寂れてしまった街。センター通りのように性格も街並みもすっかり変わってしまった街。諸味百軒通りのように米国人相手から沖縄人向けの飲み屋街にガラリと変えた街 [31]。このようにして，基地経済によって発展したコザは，基地がいまだに留まり続けているにもかかわらず，日本復帰と共に急変し，経済面や商売面，街の雰囲気までも目まぐるしく変貌を遂げていったのであった。以上が A サインに関わるコザの記憶である。では，次章からは，聞き取り調

査によって得られた証言を述べていく。

Ⅲ　聞き取り調査―住民意識―

１）Ａサインを掲げている元Ａサイン店

（ａ）チャーリー多幸寿

中央パークアベニューに位置する，チャーリー多幸寿（写真 3・4 参照）の創業者・勝田直志氏（87 歳）に聞き取り調査をおこなった。以下がインタビュー内容である。

「1950 年の 7 月に八重島で外国人向けの特飲街としてできたのが始まりなんだけど，当時はすごい忙しくて，街もまだ整理されていなかった。米兵の遊び場を作ってあげる思いから特飲街を作ったのだが，昼も夜も繁盛していた。その頃は，アメリカ帰りの人がレストランをしていた。僕の同郷（鹿児島の喜界島）のマエダケイスケさんもそのひとりで，僕はその人と一緒にコザにやって来た。僕自身は，1944 年 11 月に沖縄戦で戦い，1 年間収容所生活を送って、その後は地元の喜界島に帰って役場の仕事をしていた。でも，当時は定年しても保障がなかったので，どうしようかと考えた時に，マエダさんに声をかけられ，1950 年にマエダさんと一緒に八重島に行ってレストランを始めることにした。その時は単なるボーイをしていた。その後，店を始めたんだけど，

当時はスーパーレストランという名前（1956 年創業）で，チャーリーになったのはタコス専門になってから。アメリカ人にあなたのタコスうまいと言われたのがキッカケで、1963 年からタコス専門にした。チャーリーという名前の由来は，名前のチャーリーもアメリカ人が日本の名前は言いにくいからという理由。ちなみに，今お店で飾っている A サインは，新基準と言われるもの。新基準はとても厳しかった。瓦かブロック，男女別々のトイレ，床はタイル，お湯を沸かして食器を消毒など。検査官は 2 人ぐらい週に 1 回抜き打ちでやって来て，従業員のヘアースタイルや爪からチェックをし，5 項目以上チェックされると，一時 A サイン預かりになってしまうんだけど，チャーリーでは取り上げられることはなかった。レストランは赤 A、クラブやバーは青 A、牛肉を売ったりする物品販売は黒 A だったんだけど，必ず黒 A で買ったものを赤 A で使わなければならない規制もあった。復帰と同時に効力をなくしてしまったけど，A サインのおかげで本土より衛生面に関して進んでいた。当時本土の人が来た時，A サインの店は気持ちが良いと誉めていたのを覚えている。この時，検査は厳しかったけど，A サインにして良かったと思った。また，A サインにしていたので，ベトナム戦争の時は大儲けすることができた。ベトナム戦争の休暇中に有り金を使って飲み食いしていた。ベトナム行って死ぬかもしれないから。でも，A サインのクラブやホテルは大儲けしたけど，レストランは実はそこまでだったよ。やっぱりコザ市は復帰までが良かったね。BC ストリートも当時は対面通行だったけど，一方通行になってしまった。道路が対面だと危なくて，歩行者道路も広がって。一方通行だと不便なので，

お客さんも去っていってしまった。また，復帰して外国人も減ったしね。それにAサインがなくても外国人が入れるようになると，結局米兵は女目当てだから，最終的には綺麗な女性がいる店に集まってしまった。それでもAサインを掲げている理由は，昔の名残を残したかったから。意味は特にないよ。でも，Aサインというお店は，衛生的に厳しかったので，キレイというイメージを与えることができるかな。それは日本人向けでもあるし外人向けでもあるよ。昔厳しいのがあったよと従業員には言っている。テレビでも昔のことをやるように，昔戦争が終わった頃，こんな風になったよ，というぐらい。今はAサインがなくなってきたけど，それは時代の流れだね。仕方がない。当時に比べて他の店も衛生面が格段に上がっているし，当時はクーラーがAサインしかなかったけど，今は大体ついているからね。生活程度が変わってきたし，今頃言っているのもどうかと。時代に応じていかないといけない。ただ，昔こういうのがあったよと語り継ぐ意味では必要かもしれない。内装だってほとんど変わっていないし。そういえば，昔は外国人が客層だったけど，今は真逆になった。息子に店を譲ってるしね。今の沖縄の店って，チェーン店にするか，のれんを守るかなんだけど，チャーリー多幸寿はのれんを守ってほしいね。そういった意味で，2代目のAサインが今後の課題かもね。今の2代目は，生まれた時から施設があって，何もなかった我々とでは，やっぱり考え方が違うかもしれない。」

このように，1950年からコザで働く初代オーナー勝田氏にとって，Aサインの記憶は衛生面を強調している。これは前章でも

述べたように，発展を遂げた八重島に始まり，オフ・リミッツやAサイン制度を経て，絶対的な高等弁務官が関わっている新Aサインは，当時飲食店を営む人々にとってコザの死活問題となっており，それを守り続けたことに誇りがあったと伺える。特に，米軍占領下にあったコザの住民にとって，本土よりも衛生的に優れていたことを知った時，Aサイン店ならではの誇りを感じていた。一方，コザという街そのものが，時代に応じて変化してきたこともあってか，もうAサイン自体に意味はないと感じ，従業員に戦後の歴史を伝えるひとつの素材として扱っていた。

（b）オーシャン

ゲート通りに位置する，OCEAN（写真5・6参照）の3代目オーナー・屋良靖氏（49歳）に聞き取り調査をおこなった。以下がインタビュー内容である。

「お店は，1967年にシュゼットという名前で始まった。父親のお姉さんが初代，その後お母さんが継いだ。俺は継いで，27年目になるよ。俺が始めた頃は，まだ日本人がいなかった俺が米兵を毛嫌いしているし，この街自体米兵が遊ばなくなった。エアフォースの人に限っては全く使うことはなく，海兵隊がたまに使っている。この前，米兵が勝手に店にトイレに入ってきて、薬の空き箱だけ捨てたり吐いたりするのには，本当に嫌気がさした。でも，Aサインは営業許可証だったけど日本政府ができなかった分，

アメリカがやっていたのは良いんじゃないかなとは思う。Aサインはコザのシンボルって感じる方もいるかもしれない，当時は相当儲かったから。でも，俺はそうは思わない。Aサインを持っていたことにプライドはなかった。ただ，儲かったなぁと思う。思い入れはないけど，こういう歴史があったんだよ，てかんじかな。歴史的価値はあると思うし，これがあると話も広がるし，金銭的価値はもうないよ。ただ，バブルの時は 30 万で譲ってくれという話はあった。そういえば，通り会が 2 年ぐらい前から概観を変えてくれという話があったけど，やめてくれと言っている。この通りはたかだか 65 年の歴史だから、まだイメージが定着していないんだから。景観を変えると，コザがあやふやになってしまう。俺は生まれも育ちもコザだから他の街は知らないけど，コザのイメージをせっかくみんなが認識し始めたのに，景観を変えるとどこにでもある街になってしまう。だからこそ，Aサインは残さないといけないかもしれないな。やっぱり戦争からの記憶であるし。沖縄の人は記憶の記録をしていかないといけない。沖縄市の経済の記憶。事実は残していくべきだ。だから，何も知らない人がここに来た時,『このAって何ですか？』て聞かれるぐらいで良い。もしこれがなければ，どこにでもある店になってしまえないから。」

このように，ベトナム戦争から 3 代目オーナーとして働いている，屋良氏は，Aサインの記憶は，当時儲かった思い出だと強調していた。また，米軍基地へ向かうのに直接関わるゲート通りで経営しているため，米兵とのトラブルを抱えていた。そのことも

あってか，Aサインには思い入れがないとは言いながらも，やはりコザの歴史として伝えるため A サインを残す必要性があると主張していた。

（c）メキシカンハウスレストランリマ

諸見里に位置する，メキシカンハウスレストランリマ（写真 7・8 参照）の 2 代目オーナー・豊里友一郎氏（40 歳）に聞き取り調査をおこなった。以下がインタビュー内容である。

「初代は父親で，自分は 20 年前からこの店にいるのだが，10 年前からオーナーとして働いている。当時は外人がメインだったから，今でもたまに来た時に懐かしいなと言ってくれる。夏場は観光客が来るけど，普段は地元の人。最近はほとんど外人の方がこっちまで足を運ばない。若い奥さんは A サインについて分からないけど，知っている方は守ってるねと言ってくれる。ずっとメキシカン料理とステーキをやってきたのだけど，外人の方々はもっと色んなもの食べたいと言っていたので，中国料理の炒め物をするなど，チャンプルー文化じゃないけど，何でもあるように今はした。今は居酒屋がほとんどでしょう。コザが変な方向にいっている気がする。変に新しくしよう新しくしよう。昔からある古いイメージを残していくべき。ゲート通りは昔のようだけど，中央パークアベニューなんかも変わって，もっとネオンとかあっても良いのではないか。A サインはコザのシンボルだけど，飾りだと

思っている人の方が多いんじゃないかな。うまく外人と共存共生しった証だし。それに，沖縄はやっぱり基地がなくなると死活問題になる。昔から住んでいる人は基地なんてなくして欲しいのかもしれないけど，僕達にとっては外人でもお客さんだし，日本人でもお客さんなんだから。自分の同級生も基地で働いているからそう思うのかもしれないけど。この店自体，トイレの位置も変わらず，少しだけ内装をいじったよ。20 年前に改装して，今は日本人の家族向けに畳の席がある。最近，コザの様子には寂しい。古きよきコザが残っていたら，もっと人が集まるのに，今はどこにでもあるような建物ばかりだ。A サインに関して言うと，自分達は昔から認められてやってきているから，A サインは誇りと言えば誇りだな。昔のように戻すのは難しいけど，外人との共存をして，ベトナム戦争の時の勢いを取り戻すことができれば良いと思ってる。」

このように，OCEAN とは違い，ベトナム戦争を知りながらも当時は働いていなかった 2 代目オーナー豊里氏にとって，A サインの記憶は，ベトナム戦争の光景を取り戻すことだと伺えた。そのため，働き始めた頃には効力のなかった A サインをいまだに飾っており，また，外人との共存の必要性を訴えていたのだろう。

（d）サンライズホテル

中の町に位置する，サンライズホテル従業員・比嘉氏（54 歳）

に聞き取り調査をおこなった。ちなみに，先述の通りAサインは飲食店に対する営業許可証のことなので，サンライズホテル（写真 9・10 参照）はホテルの中にあるレストランに対しての A サインのことである。以下がインタビュー内容である。

「店は約 40 年前から始まった。私は 30 年間働いている。初代は 15 年前に亡くなり，二代目は昨年亡くなり，現在は初代の息子である安谷屋さん（47）です。コザには小学生までいて，あとは本土で過ごしていた。戻ってきたのは，10 年前ぐらいだった。昨年からオーナーをしているけど，従業員の方が長いし，従業員達で仕事をしている。半分は初代の頃から働いている。だから，現オーナーはホテル業は副業にして，形だけのオーナーとなっている。何かあった時にだけ連絡するような関係だし，多分オーナーはAサインに関してほとんど知らないのじゃないかな。Aサイン自体飾っているけど，実際何か思い入れがあるとは思わない。ただ，私自身，Aサインと聞けば，ベトナム戦争を思い出す。当時はドル箱と呼ばれる程，すごいお金を使っていた。那覇の国際通りの昼間の人の多さ，あの人の多さが夜のコザだったわ。」

このように，現在サンライズホテルのオーナーは，息子が引き継いでいるとはいえ，中学生の頃から本土で過ごしていたように，コザで多くを過ごしていない方がオーナーとして元 A サイン店を経営するという事実があった。また，長くサンライズホテルで働く従業員の方のAサインの記憶は，ベトナム戦争であった。

２）Ａサインを掲げていない元Ａサイン店

（ａ）アジアンフレーバーズ

中央パークアベニューに位置する，アジアンフレーバーズのオーナー・桑江清氏（63 歳）に聞き取り調査をおこなった。同氏は，中央パークアベニューの通り会の理事長でもある。以下がインタビュー内容である。

「僕は本土の大学に行って，こっちに戻って就職した後，最近親の店を改築して始めた店なんです。もともとはクラブ ACE（エース)。Ａサインはもう飾ってないよ。コピーはあるんだけど。Ａサインは，たしかにコザの思いが凝縮されているよね。でも，今は時代に合わせるしかないし，飾るつもりは全くないよ。コザの持ち味は，音楽と画一的な飲食店。Ａサインは生活のためだったから，もうのれんを守るのも難しい。なぜなら，僕は年齢的には2代目だけど，初代は大体儲けた後，違う仕事に移っていったからね。だから，今はＡサインについてこだわってないね。こだわっている人もいるけど。言葉は悪いけど，歴史だけでは生きていけないと思う。たしか 24・5 年前が転換期だった。この頃からほとんど来なくなったからね。通り会の理事長として考えているのは，商売は経営者によって違うから，パークアベニューの景観の良さをかえずに，色んな店が入っていけば良いと思う。パークアベニューって空き店舗があるようで，実は全くない。空くとすぐ

入ってくる。他の通りと違って，そこはパークアベニューの歴史が強みかもしれない。だからこそ，景観にはこだわっていきたいよね。」

このように，親が元 A サイン店を経営していたものの，引き継ぐことはなく，それとは別の形で店を始めたオーナー桑江氏の A サインの記憶は，コザの思いが凝縮したものだということだ。これはチャーリー多幸寿のオーナーが指摘していたように，レストランよりクラブやバーの方が儲かったので，他の元 A サイン店のオーナーよりも強調したのではないかと見受けられる。ただし，今では全く A サインにこだわっていない点は，サンライズホテル同様，すぐに店を引き継がず，違う仕事をしていたからではないかと考える。

（b）やま

中央パークアベニューに位置する，やま（写真 11・12 参照）のオーナーの夫人で従業員・山岸氏（60 代半ば）に聞き取り調査をおこなった。この店はもともと「クラブ東京」という元 A サイン店であったが，オーナーと「クラブ東京」には全く関係がなく，たまたまこの場所で喫茶店を始めた訳である。以下がインタビュー内容である。

「私は夫とともに 28 年前に東京からやって来た。もともと，コ

ザには住んでいて，高校卒業と同時に上京している。夫は東京の人で，珈琲学校に通っていたので，喫茶店を営む時にこっちにした。この店のポリシーとして，日本語が分かる人でない限り，入店拒否している。だから，どちらかと言えば，日本人向けにしている。なぜかというと，珈琲をゆっくり飲んで楽しんで欲しいため。だって米兵は 50 セントで水代わりに飲むでしょう。場を壊してほしくないから。別に，外国人だからと言って，嫌悪感がある訳ではないけど。なんせ，もともとここに住んでいたから，共存意識はあったし，小さい頃クリスマスやハロウィンで米兵にお菓子をもらいに行った思い出もある。それに，何の因果か分からないけど，実は小さい頃（12 歳頃），この店にヤカンを届けに行ったことがある。ここが A サインだとは知っていたけど，この店が A サインだからと言って選んだ訳ではない。買い取った時は何もなかったし，面影なんかないよ。キッチンやトイレも新たに作り直したしね。それに，そういえば，小さい頃の記憶を辿ると、キッチンは今と逆にあったわ。A サインに関しての記憶と聞かれると，外国人の方が集まるお店だな程度かな。」

このように，元 A サイン店とは知りながらも，特に A サインに関しての記憶を店に受け継ぐ気配のないまま経営している例もある。

（c）響

八重島に位置する，響（写真 13～16 参照）のオーナー・洲鎌盛雄氏（62 歳）に聞き取り調査をおこなった。同氏は 1972 年から 2009 年まで沖縄市役所で働いていた。もともと「バーブルーリボン」という A サイン店だが，オーナーと「バーブルーリボン」とは関係がない。以下がインタビュー内容である。

「八重島のこの通りがずっと落ち込んでいて，入口付近に作れば何かのきっかけになって盛り上がってくれればという思いで，この街に店を出すことにした。A サインに関して，米軍に対しての衛生上のシステムだとは知っていたけど，どちらかと言えば，まずはこの街に店を出そうと思った。なぜなら，60 年代 70 年代のコザの感覚が残っている場所は少ない中，八重島はコザが最初に盛り上がった場所で，そのままさびれてしまったから記憶が残っていると思った。すると，A サインの店があったから，ここにしようと思った。今ではどこに行っても同じ街だし，そういうことで昔の印象を残したままましたかったから，外装も内装もほとんどいじることはしなかった。改装しようとした時，天井は落ちていたし，経費はすごいかかった。そういえば，70 過ぎた人達がたまにお客さんとして，この辺懐かしいねと言ってやってくる。私がこうして今考えるのは，沖縄市には観光とかじゃなくて，自分達が住みやすい街を作っていければと思っている。だって，八重島で生活するのは難しいからね。やっぱり落ちぶれてから時間が経っているから。それでも昔のようなコザを取り戻せば良いなと思ってやっている。」

このように，Aサインとほとんど関係ない方が，一昨年から元Aサイン店を活用した店がオープンしている例もある。外装も内装もほとんど当時のままに近く，Aサインやコザの記憶が残っているという理由で始めた店は，コザが最初に盛り上がった街をもう一度取り戻したいという思いで始めたのだ。

３）元Aサイン店以外

沖縄市中央に位置する，デイゴホテル（写真 17 参照）の 2 代目オーナー・宮城悟氏（62 歳）に聞き取り調査をおこなった。以下がインタビュー内容である。

「ここは 1966 年に創業したよ。当時は 17 室しかなくて食事はデリバリーをしていたのだが，ベトナム戦争で部屋が足らなくなったから，改築した程だと聞いている。でも，売春としては利用させなかった。たしか米兵が急に入ってきて『How much？』と言ってきたことがあるとも聞いた。ベトナム戦争の時はAサインだけじゃなくて，宝石店や質屋やホテルも儲かった。Aサインに関しては米軍相手の象徴だから，今では別にそんなに儲けないし。むしろ通り会ではいかに観光客を取り込もうかという話し合いをしているぐらい。だから，A サインで儲けるのは難しいよね。70 年代後半から外人が減ってきたのは事実だし。昔のことで言えば，僕はオフ・リミッツは民間いじめだったと感じている。コザを代表とするAサインは，今ならチャーリーとニューヨークぐ

らいかな。」

このように，元 A サイン店ではない店にとって，A サインの記憶は，当時儲かったという記憶があったものの，今では何も効力がないと否定し，これは A サインを掲げる元 A サイン店とは全く違った意見である。また，デイゴホテルでは売春として利用させなかった。これは聞き取り調査をした元 A サイン店でも言えることであったように，A サインとホテルとは別の話であるとはいえ，現在昔から残っている店には売春とは無縁である。さらに，先述したように，オフ・リミッツが真面目に働いている人にとって，やはり理不尽な措置だと感じていたようだ。

Ⅳ　考察

以上のように，本稿では，沖縄県沖縄市とりわけ旧コザ市の元 A サイン店を事例にして，住民意識から「場所の記憶」について述べてきた。アルヴァクスは場所と記憶の関係について，「場所は集団の記憶の刻印を受けており，あらゆる集団のあらゆる歩みは空間の用語によって表現することができるし，集団の占有する場所はあらゆる用語の集合にほかならない。この場所の一々の様相，一々の細部はそれ自体，集団の成員にしか理解できない意味を持っているのである」と述べている [32)]。つまり，A サインの持つ「場所の記憶」は，コザにおける人間にとってのみ意味を持つのである。このことは第 3 章の聞き取り調査によって，第 2 章

で述べた「場所の記憶」に新たな意味を付与することができたと考える。たとえば，新Aサイン制度になった時，多くの生活者に大打撃を与える一方，衛生観念の向上につながったとあったが，この衛生観念の向上が，現在でもチャーリー多幸寿にとって誇りと感じていることが再認識できた。

また，このことは他の元Aサイン店にも当てはまる。というのは，ネアルンは，「場所には，そこにいる人間と同じくらい多くのアイデンティティがある」と述べている[33]。つまり，アイデンティティは都市や自然景観のなかにあると同様に，観察者の経験や，目，心，そして意志の中に存在するように，聞き取り調査で得た元Aサイン店でも同様のことがあった。いつの時代に生まれたのか・どこで育ったのか・何をみてきたのか・どのように感じたのか，これらのうちどれかひとつでも違う元Aサイン店にとって，Aサインに関するアイデンティティも各々違う結果がでたのは当然のことである。

したがって，住民達がAサインについて感じていることは，オフ・リミッツ以前から働く初代オーナーにとっては衛生面という認識を持っている。また，二代目・三代目オーナーにとっては本土で育ったのかコザで育ったのかに違いがあり，コザで育ったオーナーは，ベトナム戦争の華やかな光景を想起され，本土で育ったオーナーには，Aサインを誇りと感じているとは言い難かった。さらに，元Aサイン店とは関係なく始めたオーナーにとっては，特に意識をしていないオーナーもいれば，起爆剤として捉えるオーナーもいるのが分かった。

V　おわりに

今回、卒業論文の執筆にあたって旧コザ市に計 2 回 10 日間滞在したのだが，コザの記憶全てを理解した上で論じることはできなかった。なぜなら，滞在中にまちづくり NPO コザまち社中の古堅宗光氏とお話をする機会があったのだが，「コザの住人はそれぞれが違う想いを持っているから，誰一人として同じではない。」とおっしゃっていたのが印象的だったからだ。つまり，聞き取り調査にしては，ただでさえ少ない母体にもかかわらず，コザ全てを理解した上で論じることは難しかったのかもしれない。

しかし，本稿の趣旨とは別に，響のような店を見つけることは最大の成果だったと考える。なぜなら，昨年，中央パークアベニューのチャーリー多幸寿と同じく老舗のニューヨークレストラン（写真 18 参照）が閉店してしまい，またひとつ元 A サイン店がなくなってしまったからだ。つまり，今後元 A サイン店を活用した街づくりの例として響のような店が挙げられるのではないかと考える。

それでは，最後に今回の卒業論文執筆にあたり，ご協力していただいた，沖縄市役所の方々，インタビュー調査させていただいた方々，そしてご指導していただいた山崎孝史准教授に感謝します。

注

1）　今後,「Aサイン」は，許可証自体を指す。その他，Aサイン制度。Aサイン店，元Aサイン店として使い分ける。

2）　沖縄市企画部平和文化振興課(1998):『KOZA BUNKA BOX 創刊号』，p.13による。

3）　ドリームショップによる。2002 年度に沖縄商工会議所に引き継がれたが，2003年度には終了した。

4）　沖縄市企画部平和文化振興課（1998)，p.25による。

5）　波平勇夫(2006)による。

6）　津屋武雄(1998)による。

7）　コザ市(1974)，第 11 章による。

8）　山崎孝史（2009）による。

9）　「沖縄を知る事典」編集委員会編(2005)p.56による。

１０）　沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール(1994)，p85-89による。

１１）　新崎盛輝(2005)，p.22による。

１２）　沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール(1994)，p92-99による。

１３）　嘉陽義治(2007)による。

１４）　山崎孝史(2008)による。

１５）　同上による。

１６）　嘉陽義治(2007)による。

１７）　沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール(1994)，p.91による。

１８）　嘉陽義治(2007)による。

１９）　沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール(1994), p.91 による。

２０）　沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール(1994), p.125 による。

２１）　廣山洋一(2000)による。

２２）　山崎孝史(2008)による。

２３）　同上による。

２４）　同上による。

２５）　沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール(1994), p.178-179 による。

２６）　山崎孝史(2008)による。

２７）　沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール(1994), p.270 による。

２８）　沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール(1994), p.249 による。

２９）　沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール(1994), p.278 による。

３０）　山崎孝史(2008)による。

３１）　廣山洋一(2000)による。

３２）　宮下克也(2008)による。

３３）　高野岳彦(1991), p.82 による。

参考文献

コザ市(1974):『コザ市史』，帝国地方行政学会。

新崎盛輝(2005):『沖縄現代史』，岩波書店。

「沖縄を知る事典」編集委員会編(2005):『沖縄を知る事典』，日外アソシエーツ。

沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール(1994):「:『戦後コザにおける民衆生活と音楽文化』，榕樹社。

沖縄市企画部平和文化振興課(1998):『KOZA BUNKA BOX 創刊号』，光文堂。

沖縄市企画部平和文化振興課(2000):『KOZA BUNKA BOX 第 2 号』，光文堂。

沖縄市企総務部総務課 (2007):『KOZA BUNKA BOX 第 3 号』，光文堂。

沖縄市企総務部総務課 (2008):『KOZA BUNKA BOX 第 4 号』，光文堂。

沖縄市企総務部総務課 (2009):『KOZA BUNKA BOX 第 5 号』，光文堂。

高野岳彦(1991):『場所の現象学』，筑摩書房。

片桐雅隆(2003):『過去と記憶の社会学 - 自己論からの展開』，世界思想社。

森村敏己(2006):『視覚表象と集合的記憶 - 歴史・現在・戦争』，旬報社。

小野沢あかね (2000):「コザにおける特飲街」，KOZA BUNKA BOX 第 2 号，p.34～40 頁。

廣山洋一（2000）:「特飲街・吉原」, KOZA BUNKA BOX 第 2 号, p.41～47 頁。

嘉陽義治（2007）:「新聞記事を中心に見る特飲街へのオフ・リミッツ発令（一九五一～五二年）」, KOZA BUNKA BOX 第 3 号, 46～56 頁。

山崎孝史（2008）:「USCAR 文書からみた A サイン制度とオフ・リミッツ」, KOZA BUNKA BOX 第 4 号, p.33～57 頁。

山崎孝史（2009）:「軍事優先主義の経験と地域再開発戦略―沖縄『基地の街』三態―」, KOZA BUNKA BOX 第 5 号, p.24～48 頁。

波平勇夫(2006) :「戦後沖縄都市の形成と展開 ： コザ市にみる植民地都市の軌道」, 沖縄国際大学総合学術研究紀要 9(2), p.23～60 頁。

宮下克也(2008) :「記憶の覚醒と地域づくり ： 沖縄の都市近郊の事例から」, 哲學 119, p.233～256 頁。

ドリームショップ（2011 年 1 月 10 日アクセス）

http://www.koza.ne.jp/koza_index/dreamshop/index.html

（20,647 字）